企画・制作：(株)読売広告西部　広告

婦人科がん検診の未来を「熊本の地」で考える

第22回日本婦人科がん検診学会が11月9日から2日間、熊本市で初めて開催される。大会長として誘致に尽力された熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学分野、片渕秀隆教授に、婦人科がんの増加や若年化、有効な子宮頸がんの検診と予防、最近のワクチン問題などについて話をうかがった。

第22回 日本婦人科がん検診学会 総会・学術集会 11月9日(土)・10日(日) 熊本市で開催。

大会長・熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野教授 **片渕 秀隆 氏に聞く**

――日本婦人科がん検診学会開催の意義を伺います。

片渕　1982年の老人保健法制定によって検診システムが導入され、子宮頸がんは減少しました。日本ではがんで減少したのは胃がんと子宮頸がんしかありません。ただ当時はこの二つのがんが他のがんを圧倒するようにきわめて多く、1950年頃、がんで亡くなる女性の患者さんの25％が子宮頸がんでした。胃がんも同じように多くの人が亡くなっておられました。老人保健法の制定ではこの二つのがんを中心にもっとしっかりがん検診をして20年がかりで死亡率を半分に減らすことが目的でした。

これによってがん検診が正式に導入されて大きな効果を発揮し、子宮頸がんはその後減少しました。ところが1990年代の後半から子宮頸がんは再上昇に転じます。

私が学生時代に習った教科書では子宮頸がん年齢のピークは40代、50代と書いてありました。ところがそれから30年しかたっていないのに子宮頸がんの患者さんの約半分が20代、30代になっています。これが最近の大きな特徴です。

OECD22か国のデータでは日本のがん検診の受診率が最下位です。アメリカは80％を超え、ヨーロッパも軒並み70～80％ですが、日本はいまだに20％台でとどまっているところに問題があります。20代、30代の受診率はさらに低くなっています。

原因は子宮頸がんなどのがんは中高年がかかるものと思われているからです。しかし子宮頸がんは例外で、この30年の間に20代、30代の人たちに増加してきたという現実があります。日本だけでなく欧米諸国を含めて多くの国で検診の効果がはっきり示されているにもかかわらず、日本では認識が薄く若い人が子宮頸がん検診を受けてくれません。

なぜこの学会を熊本で開きたかったかと申しますと、過去21回中、19回は東京で開催され、あとは仙台と大阪でした。今回熊本で開催することによって婦人科がんが大いに注目されることを期待しています。

――婦人科がんの傾向は。

片渕　婦人科のがんと比べると、他のがんはほとんどが生活臓器に発症し、日常生活に支障をきたします。そのためがんに対する認識が高い。ところが子宮を含めた婦人科の臓器はたとえ失っても生きていくうえでは問題がない。若い頃に子宮や卵巣をなくしても天寿を全うする人はたくさんおられます。

30年前まで子宮頸がんを含めて婦人科のがんは中高年のがんで、ちょうど生殖年齢を終えた年齢層でした。子宮や卵巣の機能を十分に発揮し、その後にがんになっても役目を終えた臓器をとるということでした。しかし今は20代、30代で子宮頸がんを発症する人が多くなり、食生活の欧米化や少子化、初産年齢の上昇といったことで子宮体がんや卵巣がんの発生率も高くなっています。

その一方で女性は自分のキャリアをもって社会進出するためになかなか結婚や出産ができない。20代、30代が妊娠の中心だったのが、30代後半から40代前半に移り、極端な場合は40代後半になって出産しようとする人もいます。

20代、30代に婦人科がんが増加し、一方で30代後半から40代へと妊娠の時期がシフトしている。子供を産むために卵巣や子宮を使わなくてはならない年齢に子宮頸がん、体がん、卵巣がんが増え、そのために目的を果たすことができずにあきらめてしまうことになります。

――婦人科がん検診の特徴は。

片渕　子宮頸がん検診はもっとも早く確立し厚生労働省によってもっとも効果のある検診と評価されてきました。胃がんや肺がん検診は内視鏡やレントゲンで患部を機器を使って間接的に見ることになりますところがが子宮頸部だけは医師の目の前10cm先に子宮頸部が見え、直接患部表面にある細胞をとってくることができます。

乳がん検診は乳房のレントゲン写真をとることによって間接的にがんがあるかいかを見るのですが、それでも確定診断ができず、さらに細胞をとって調べるというソーステップが必要になります。

子宮体がんは見えるところにありません。ただ子宮の奥に器具を挿入することによって直接到達することができますが、痛み、出血があります。子宮体がん検診は子宮頸がん検診から5年遅れて1988年に正式にがん検診システムに組み込まれましたが、残念ながら普及していません。

また卵巣がんはお腹の中にあって直接タッチして検査することはできません。超音波検査、血液検査で腫瘍マーカーを使ってスクリーニングするなどを組み合わせた検診システムを導入しようとしたのですが、時間も費用もかかり断念も低くく多くの人を対象にした検診にはなっていません。

――子宮頸がんの低年齢化について。

片渕　がんの中で本当に原因が分かっているものはほとんどありません。しかし子宮頸がんの場合は1983年にツール・ハウゼンというドイツの学者がHPV（ヒトパピローマウイルス）の感染がきっかけになるということを同定し、これがHPVワクチンの開発につながって子宮頸がんを予防できるようになりました。2008年、ツール・ハウゼンはノーベル賞を受賞しましたが、WHOは二十世紀の大発見だと評価しています。

しかしHPV＝子宮頸がんではありません。感染した人の大体0・15％が子宮頸がんになるといわれ、HPVに持続感染することがガン化の原因にあげられています。

子宮頸がんの若年化には性行動の変化が関係し、女性のみならずパートナーの男性にも原因があります。今は高校三年生の45％に性交経験があるというデータがあるほどですから、若い世代にHPVに感染する機会が増えていることが現実です。

もう一つは腺がんが増えております。子宮頸がんは二種類あります。扁平上皮がんのように皮膚にできるものと、唾液腺のようにが分泌物を出すところに発症する腺がんがあります。腺がんは若い人に増えており発見がむずかしく、化学療法や放射線など従来の治療が効きにくいがんです。子宮頸がんの治療ガイドラインの改訂では扁平上皮癌とは別に項目をたてて注意しています。このほか妊娠合併の子宮頸がんがあり、妊娠しながら子宮頸がんにかかっているケースも増えています。従来の治療法を変えていくことが必要になりました。

――子宮がん検診の啓発活動を熱心にされていますが。

片渕　産婦人科に対する敷居を下げる努力が必要です。婦人科がんの危険性を認識してほしいと思います。若い女性、生殖年齢にある女性にがんが増えていることを知っていただきたい。

数年前までは婦人会に行くと中高年の女性が多くいらっしゃいますので、そこで話をしました。さらに若い人に伝えるために高校に行き子宮頸がんの話をしました。ところが一番大事な20代、30代の人は婦人会には来ませんので、職場を訪ねました。銀行やデパートなどには若い人が多く働いておられますので企業の健康教育の一環として話をさせてもらっています。

――ワクチン問題について。

片渕　ワクチンを打つと七割の子宮頸がんを予防できます。しかし八百五十万件の接種のうち三百五十七件、2・5万回に一回は重篤な障害が出るということで問題になりました。

日本では2011年に百五万人の赤ちゃんが生まれ、お産をしたお母さん43人が亡くなられました。2・5万人に一人の割合です。これは世界的にみるとすごく低い数字ですが、いまだにゼロにはなりません。しかし2・5万回に一人亡くなったから妊娠もお産もしないという人はいないと思います。

危険があるがそれでもワクチンを選ぶか、それともこわいからワクチンを打たないか。それでは打たない人の体をどう守るのか。そこに子宮頸がん検診の大きな役割があります。

子宮頸がん検診があるからワクチンには反対だという意見がありますが、それは検診率が欧米並みに8割以上もあるというなら分かります。しかし日本の検診率が3割以下、20代、30代の受診率はそれ以下という現状では成り立ちません。子宮頸がんワクチンと子宮頸がん検診は対になって考えるべきです。すぐれたワクチンがあるのになぜ使わないのかを考えるべきです。

――現場の医師はどう対応しておられますか。

片渕　ワクチン接種は産婦人科だけではなく、多くは小児科、内科で行われています。接種は3回打ちないといってきましたが、厚労省の方針が出たために1回、2回打った段階で止まっているというのが現状です。

今年4月から定期接種に切り替わって接種率が大幅に上がったのですが、その2か月後に勧奨をひかえたことから受診率はストンと落ちました。国の決めることですから方針が出るのを待つしかありません。ただ個人としては効果があるワクチンを使った方が良いと思っています。

――十分に理解していただいた上でワクチンを勧めたいということですか。

片渕　そうです。厚労省の方針が出た後にある高校で講演し、アンケートを書いてもらいましたが「そんなおそろしい病気を高い確率で予防できるのなら、私はワクチンを受けます」という生徒がいました。私たちは正しいことを根気よく教えていきたいと思います。

――市民公開講座について。

片渕　産婦人科にもっと目を向けていただきたいと二つのパートを設けました。一つはHPVワクチンにたいする本音を聞いてみようと小学校の先生、PTA、行政の方々に出席していただき、皆さん方が現場でどう思っておられるのかを話していただきます。パート2では子宮頸がん検診のことを正しく知りたいという一般の人たちのための講座です。

この機会に是非参加されてはいかがでしょうか。必ずためになる話が聞けると思います。

熊本大学大学院生命科学研究部
産科婦人科学分野
教授 **片渕 秀隆氏**

1982年、熊本大学医学部卒業、同附属病院産科婦人科研修医、米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部病理学講座研究員を経て熊本大学医学部講師。同助教授、2004年より熊本大学大学院医学薬学研究部教授。2010年の改組により同大学院生命科学研究部産科婦人科学教授、現在に至る。
日本産科婦人科学会理事、日本癌学会評議員、日本癌治療学会評議員、日本婦人科腫瘍学会常務理事など。医学博士。

第22回 日本婦人科がん検診学会

The 22nd Annual Meeting Japanese Society of Gynecological Cancer Screening

日時　2013年 11/9(土) 13:00～18:00 ・ 10(日) 8:30～12:00
会場　くまもと県民交流館パレア　熊本市中央区手取本町8-9 テトリア熊本(鶴屋東館)10階 TEL.096-355-4300
会長　片渕 秀隆　熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野

日時　市民公開講座 2013年 11/10(日) 10:40～14:40 ※10：25開場予定
パートⅠ　HPVワクチンの本音を聞いてみよう!
パートⅡ　子宮頸がん検診のことを正しく知りたいあなたの為の講座です。

参加費無料
定員300名

プログラム

※事前の参加申込みが必要です。応募締切／2013年10月31日(木)消印有効。
定員になり次第応募を締め切らせて頂きます。事務局受付後、聴講券（はがき）を郵送いたします。

市民公開講座パートⅠ（学術集会 ワークショップⅢ）
HPVワクチンの本音を聞いてみよう!
10:40～12:20
座　長：八重樫 伸生 東北大学医学部産婦人科
　　田代　浩徳 熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野
ステートメント：野田 起一郎 子宮頸がん征圧をめざす専門家会議
①小学校におけるがん教育の実際
　演者：久保田美穂 埼玉大学教育学部付属小学校
②PTAの立場から
　演者：片渕美和子 一般財団法人熊本県PTA教育振興財団
③産婦人科医の立場から
　演者：片渕　秀隆 熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野
④行政の立場から
　演者：岩田　眞美 横浜市健康福祉局健康安全部
学術集会　閉会式　12:20～12:25

市民公開講座パートⅡ
子宮頸がん検診のことを正しく知りたいあなたの為の講座です。
13:00～14:40
座　長：村上　美香 KKTくまもと県民テレビ
　　片渕　秀隆 熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野
①子宮頸がんのリスク因子
　演者：高石　清美 熊本大学大学院生命科学研究部 産科婦人科学分野
②子宮頸がん検診の成り立ち
　演者：加来　恒壽 九州大学大学院医学研究院保健学部門
③子宮頸がん検診（細胞診）の方法
　演者：柳井　広之 岡山大学医学部附属病院病理診断科
④HPV-DNA検査併用検診
　演者：藤原　寛行 自治医科大学産婦人科

応募方法　はがき、ファックス、メールで①郵便番号・住所②氏名③年齢④性別⑤電話番号⑥複数名の場合はそれぞれの郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・電話番号を明記して下記事務局へお送りください。ご質問のある方は質問内容を明記して下さい。参考とさせていただきます。電話での受付けはいたしません。
応募締切　2013年 10/31(木) 消印有効（FAX、E-mailも同様）
ハガキ　〒860-8556 熊本市中央区本荘1-1-1 産科婦人科学分野内 第22回 日本婦人科がん検診学会事務局「市民公開講座」宛
●FAX／096-363-5164　●E-mail／obgyn@kumamoto-u.ac.jp
お問い合せ　第22回 日本婦人科がん検診学会事務局「市民公開講座」係 TEL 096-373-5266（平日のみ／9:00～17:00）

第22回 日本婦人科がん検診学会
総会・学術集会の開催をお慶び申し上げます
（順不同）

『医療を通じて、公に一肌脱ぐ』
健康保険 熊本総合病院
病院長 島田 信也
熊本県八代市通町10-10
☎0965-32-7111 FAX.0965-32-2772
http://www.kumamoto-gh.jp/

独立行政法人 労働者健康福祉機構
熊本労災病院
地域周産期中核病院
院 長 工藤 惇三
熊本県八代市竹原町1670
☎0965-33-4151
http://www.kumamotoh.rofuku.go.jp/

阿蘇唯一の産婦人科を有する
医療法人 坂梨会
阿蘇温泉病院
理 事 長 坂梨壽惠夫
総 院 長 下村 貴文
産婦人科医師 荒尾 慎治
〒869-2301 熊本県阿蘇市内牧1153-1
☎0967-32-0881(代) FAX.0967-32-4462
http://www.asospahp.jp

医療法人 聖粒会
慈恵病院
理事長 院長 蓮田 太二
熊本市西区島崎6丁目1-27
☎096-355-6131
http://jikei-hp.or.jp/

医療法人 潤心会
熊本セントラル病院
理事長 安倍 弘彦
院 長 南野 隆一
〒869-1235 熊本県菊池郡大津町室955
☎096-293-0555(代) FAX.096-293-2562
http://www.kchosp.or.jp/

末永産婦人科医院 SUENAGA OB/GYN CLINIC
院 長 末永 正義
副院長 末永 義人
熊本市西区二本木2丁目10-13
☎096-352-7280
http://www.suenaga-obgyn.com/

レディースクリニックなかむら Ladies Clinic NAKAMURA
院長 中村 敏光
〒861-8039 熊本市東区長嶺南1丁目5-48
☎096-213-1555
http://www.lc-nakamura.com/

森川レディースクリニック 産婦人科一般・更年期治療・不妊治療・各種検診
理事長 森川 信博
院 長 永田 康志
〒862-0950 熊本市中央区水前寺6丁目31-1
☎096-381-4115 FAX.096-383-0954
http://forest-river.ecgo.jp/

医療法人社団 田山会
田山産科婦人科医院
院 長 田山 親行
熊本県宇土市入地町161-2
☎0964-22-5522
http://www.tayama-cl.com/